

近田一郎教授のご退任に際して

北 條 文 緒

近田一郎先生は1970年4月から23年間、教授として本学に勤務され、この3月、ご健康上の理由で定年より2年早く退職された。1988年3月までは短期大学部英語科、新学部発足後は現代文化学部言語文化学科に所属され、商業英語、英作文、英語講読、評論随筆、翻訳研究などの授業を担当された。また教務部長、入試委員長、英語科主任を歴任されたが、殊に英語科主任は通算8年半の長きにわたり、文字通り英語科の柱であられた。

1925年東京神田のお生まれで、東京府立第一中学を卒業後、東京商科大学予科に進まれた。予科におられた頃は戦争の真っ只中である。空襲のとき、筆筒を背中にくくりつけたおばあさまを近田先生が背中にくくりつけて自転車で逃げたというお話に、何度私たちは爆笑したことか。だが考えれば避難のあの混乱の中で自転車＋青年＋老婆＋筆筒という整然たる四段重ねが出現したとは信じがたく、爆笑を誘い出したのは何といても近田先生の文章構成力と話術であった。

商科大学（今の一橋大学）をご卒業後、3年ほど或る貿易会社に勤務された後教職につかれた。都立日本橋高校、都立商科短期大学を経て、本大学の当時の短期大学部に着任された。短期間であろうと、先生が会社勤務をされたのは不思議な気がする。会社ほど先生にはそぐわない場所はないように思えるのだが、しかしこの間に実地の経験にふれて商業英語の知識が磨かれ、後に先生の信条でもあり、またそれにかけては無比の強さを示されたところの、伝達文の簡潔さと正確さを身につけられたのだと拝察する。ある時から毎年入試の英語問題の最終校正を必ず見ていただいたが、殆ど毎年のように出題者たちが見落としていたミスプリントや、時には問題の思わぬ不備が先生の目によって発見されるのだった。

だが近田先生が本領を発揮されたのは、商業英語ではなく、むしろその対極にある随筆文学である。無味乾燥な商業書簡への反動であったかもしれない、という意味のことを『私書簡考』（『論集』第33巻第2号）で述べておられるが、一橋大学で上田辰之助教授門下であられたことを思えば、先生が一橋大学的ヒューマニティーズの伝統を継承されたのはごく自然な成り行きであったとも言えよう。随筆文学について論じられたのみならず、着任当時『学報』に書かれた自己紹介的エッセイの中の表現によれば「人生の諸相を味わいながら英文で身辺雑記を書くこと」を楽しまれた。先生のエッセイの一端は1970年から7年間、月間誌『商業英語』に連載されている。

英文の随筆を書く、読むというのは先生にとって楽しみであると同時に必然でもあったと推察する。一つにはユーモアの表現にかけては英語にしくものはないからである。たとえせっぱつまった事柄であろうと身を離して眺め、意表をつく粋組を用意して事柄のおかしさを浮かび上がらせるところにユーモアが生まれるとすれば、万事につけて実感を重んじ、体験を日常的表現でなぞりがちな日本語よりも、英語の方が近田先生にもってこいの道具であった。意表をつく粋組とは例えばこんな風だった。挿し木した椿が何年たっても蕾をつけないので、庭木に詳しい先生にアドバイスを求めたときのご返事。「水やこやしを与えすぎてはいけません。生きてゆくのがやyyとという状態に置くと、木の方でひょっとすると自分はもう生き長らえることができないんじゃないかと思う。そして子孫を残さなければいけないという気になると花をつけます」

1981年に書かれた『私観 Joseph Addison』（『論集』第31巻第2号）は、「近代散文の父」と称せられる18世紀初頭の随筆家の一人アジソンを伝記的、語学的、文学的に論じたものだが、ここに描かれたアジソン像には近田先生の自画像が見え隠れする。「調和、均整、良識」というアジソンの特質は、そのまま近田先生が自らの文章修行の目標とされたものだと思われるし、あえて声高に自己主張をしないアジソンの文体が後の *novel of manners* への道を開いたのではないかという洞察に満ちた考察が述べられているくぐりでは、先生のユーモアがまさに「語られる *novel of manners*」であったことに気付くのだった。「座右に愛蔵するとなれば、救いなき北の烈風よりも、それと気付かぬ程の微風を選ぶ。ゴヤ晩年のすさまじい絵の数々がプラドーに収まっているのに異議は唱えないが、複製一点だって部屋に飾るのは御免である」という文章はいみじくも或る批評家が *novel of manners* の作家ジェイン・オースティンについて述べた有名な言葉——もし何か迷うことがあったら、私はフローベルでもドストエフスキーでもなく、ジェーン・オースティンに相談します——と符号している。

近年は大学の内外で近田先生を失望させるものが多かった。牟礼校地付近の武蔵野の面影を残した閑静な住宅地にも地価高騰の影響で共同住宅が立ち並ぶようになった。相変わらず学生たちの敬愛の的であられたが、マス・メディア世代の学生たちは先生のユーモアの絶妙さを以前の学生たちのようには理解しなくなっていた。着任された頃とくらべて格段に複雑になった大学の運営体制や組織は、先生に息苦しさを感ぜさせた。水も漏らさぬ体制の中で教育の原点が失われてはならない、という危惧を『牟礼キャンパス二十三年の歩み』に寄せられた文章の中で述べておられる。だが時代が変わってしまったことも事実なのだ。大学の中であってさえ、規則は最小限にとどめて後は各自の良識に委ねるという、先生の言われる「大福帳的」やり方では対処できない事態が次々と出現した。ともあれ先生は最後までご自分の信念とスタイルを貫かれ、誠実と良識が職場における近田先生のキーワードだった。羨ましいばかりに家庭の幸福に恵まれておいでの先生が、趣味豊かな生活を存分に楽しまれながら本来の健康を取り戻されることをお祈り申し上げる。